

完了報告書

記入年月日 2026年2月16日

採択団体名 株式会社エヌ・ティ・ティ エムイー

■事業概要

基本情報	
事業名	小学校における、地域コミュニティを巻き込んだ防災教育プログラムの企画および実践
事業内容	事業内容①:産学連携による小学校での防災授業 事業内容②:地域全体での振り返り 事業内容③:普及・啓発ソールの制作
事業背景	<ul style="list-style-type: none">・地域の防災教育は地域の災害特性なども十分に考慮したうえで実施される必要があることから、その地域に根差し、ハード・ソフト両面を備えた環境で実施されることがプログラムの地域適合と持続性の観点で重要と考える・そのため、本件では義務教育課程である小学校を中心とし、保護者や自治体等と連携することで地域防災力向上につながる防災教育プログラムを推進する。
コミュニティ 設立の経緯	<ul style="list-style-type: none">・松本市立波田小学校の教師が、自主努力により防災教育の高度化、普及に努めていたが、本業もある中で専門性や稼働の確保に苦慮・株式会社エヌ・ティ・ティ エムイーでは防災教育のあるべき姿を探る中、松本大学で地域防災を専門とする講師と連携があり、その中で当該エリアでの実証ワーキングが発足・小学校へ民間企業が直接アプローチすることは難しいため、関係各所の理解を一つ一つ得て、自治体の縦割りを解消しながらキーマンにたどり着いた。その結果、最も効果的に官民連携で取り組める体制や周囲の理解を構築できた(松本大学の紹介→危機管理課へ説明→教育委員会の巻き込み→波田小学校校長へ連絡→キーマンとなる先生)
本事業に関する 過去の取り組み 内容	<ul style="list-style-type: none">・波田小学校では、キーマンとなる先生が、2025年4月以降“総合的な学習の時間”を用いて防災教育を実践・松本大学入江先生とNTT東日本グループは、2025年8月に防災教育のあるべき姿に向けた研究について合意(具体的な活動は、本事業から開始)
事業体制	<ul style="list-style-type: none">・松本市立波田小学校:事業①～②、小学校4年1組を実証フィールドとして提供 1名(担当教師)・松本大学:事業①～②、企画および効果検証のアドバイス 1名・松本市危機管理課:事業①～②、防災教育実施時の講師登壇および運営協力、松本市防災ターミナルの見学案内 3名・松本市防災士会:事業①～②、防災教育実施時の運営協力 5～6名・株式会社クロスデバイス:事業①、VR地震シミュレーターの提供・テルウェル東日本株式会社:事業①、練習用備蓄、防災食の提供・尾西食品株式会社:事業①、東京から防災食についてオンライン授業・日赤奉仕団:事業①、炊き出しの支援・その他、松本エリアの企業複数社:事業①、避難所運営シミュレーション時に見学および出展

<p>全体スケジュール</p>	<p>(例)調整や打ち合わせ等、採択前の活動がある場合はそちらも記載すること <7月～8月> ・松本大学との地域防災の在り方に関する議論 <9月> ・松本市危機管理課、教育委員会、松本市立波田小学校への内容説明と協力のご依頼 ・各事業者への内容説明と見積もり提出のご依頼と価格交渉 <10月～11月中旬> ・松本市立波田小学校の現地確認および企画策定 ・各事業者との実施内容の最終調整 <11月下旬～> ・コミュニティ防災教育の実践 11/21 [地域を知る]松本市防災ターミナル訪問 11/25 [災害を知る・備蓄を知る]デジタルによる地震体験、備蓄使用練習 12/9 [食を知る]防災食ビュッフェと研究 12/16 [実践する・地域に広める]保護者と地域を巻き込んだ避難所運営シミュレーション <1月> ・地域を巻き込んだ最終報告会の実施 1/19 最終報告会 ・普及、啓発パンフレットの制作</p>																														
<p>事業目標・事業成果</p>																															
<p>事業目標全般 (教育提供者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・産学連携による、学校を軸とした持続的な地域防災教育モデルの構築と提言 ・コミュニティ防災教育のフォーマットの検証 ・役割分担事例の構築、次年度取り組みの弾込め 																														
<p>事業成果全般 (教育提供者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本防災教育モデルの定量的な効果計測 ・本防災教育モデルの型紙化 ・各ステークホルダーの防災教育に関するインサイト収集 																														
<p>事業目標全般 (参加者側)</p>	<p>・防災科研「防災リテラシー尺度」による評価から、松本大学入江先生の助言のもとコミュニティ防災と関連が深い項目を抜粋し、小学生向けに平易な表現に改変することで本件用のアンケートを制作 行動/理解/備えの観点から5つのフェーズに分けて調査。</p> <table border="1" data-bbox="338 1301 1161 1570"> <tr> <td>主体的に命を守る行動ができる</td> </tr> <tr> <td>主体的に避難行動をとることができる</td> </tr> <tr> <td>周りの人たちと積極的にコミュニケーションを取ることができる</td> </tr> <tr> <td>避難所の中で役割を担うことができる</td> </tr> <tr> <td>要配慮者に手を差し伸べることができる</td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・小学生、先生、保護者を中心とした、地域全体への防災意識の波及および、防災行動や知識の習熟 ・共助の要となる地域ネットワークの強化、再構築 	主体的に命を守る行動ができる	主体的に避難行動をとることができる	周りの人たちと積極的にコミュニケーションを取ることができる	避難所の中で役割を担うことができる	要配慮者に手を差し伸べることができる																									
主体的に命を守る行動ができる																															
主体的に避難行動をとることができる																															
周りの人たちと積極的にコミュニケーションを取ることができる																															
避難所の中で役割を担うことができる																															
要配慮者に手を差し伸べることができる																															
<p>事業成果全般 (参加者側)</p>	<p>・アンケート結果は、基本的に実施前後で上昇傾向。特に、体験に直結する項目に関しては顕著に上昇 (例)保護者・地域を巻き込んだ避難所運営シミュレーションによる効果の一例</p> <table border="1" data-bbox="338 1731 1449 1955"> <thead> <tr> <th>No</th> <th>設問</th> <th>観点</th> <th>1216 実施前</th> <th>1216 実施後</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>地震が起こったとき、机の下にもぐって身を守ることができる</td> <td>行動</td> <td>3.8</td> <td>3.8</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>1人で家にいる時、地震が起きたら、安全な場所にひなんできる</td> <td>行動</td> <td>3.4</td> <td>3.5</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>ひなん所では周りの人とせっきょく的にあいさつをしようと思う</td> <td>行動</td> <td>3.0</td> <td>3.3</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>ひなん所ではいろいろな役割をやってみたい</td> <td>行動</td> <td>3.0</td> <td>3.4</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>ひなん所で困っている人がいたら手助けができる</td> <td>行動</td> <td>3.1</td> <td>3.3</td> </tr> </tbody> </table> <p>・学校新聞の制作や作文の授業で児童が本取組をテーマにあげるなど、防災に関する会話の発生をはじめとした二次的な好影響が学校活動の各所に発生</p>	No	設問	観点	1216 実施前	1216 実施後	1	地震が起こったとき、机の下にもぐって身を守ることができる	行動	3.8	3.8	2	1人で家にいる時、地震が起きたら、安全な場所にひなんできる	行動	3.4	3.5	3	ひなん所では周りの人とせっきょく的にあいさつをしようと思う	行動	3.0	3.3	4	ひなん所ではいろいろな役割をやってみたい	行動	3.0	3.4	5	ひなん所で困っている人がいたら手助けができる	行動	3.1	3.3
No	設問	観点	1216 実施前	1216 実施後																											
1	地震が起こったとき、机の下にもぐって身を守ることができる	行動	3.8	3.8																											
2	1人で家にいる時、地震が起きたら、安全な場所にひなんできる	行動	3.4	3.5																											
3	ひなん所では周りの人とせっきょく的にあいさつをしようと思う	行動	3.0	3.3																											
4	ひなん所ではいろいろな役割をやってみたい	行動	3.0	3.4																											
5	ひなん所で困っている人がいたら手助けができる	行動	3.1	3.3																											



<p>展開できる 知見やノウハウ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の“総合的な学習の時間”を活用した、コミュニティ防災教育の実践フロー（自治体、学校、事業者の役割分担や、準備の方法） ・多岐にわたるステークホルダーを巻き込むためのロードマップ（準備段階別の、関係者と交渉しておくべき内容や、決めておくべき企画のレベル感等） ・本件で用いた防災教育の効果検証アンケート
<p>コミュニティ防災教育の重要な 観点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・民間企業のマネジメントによる、関係各所の縦割りの打破 例)防災危機管理課の方から「こういう機会を創ってくれたおかげで、普段から伝えたいと思っていたことが直接伝えられた」と感謝の言葉あり。本来、危機管理課と教育委員会は同じ自治体の組織だが、自然発生的な連携が見込めない状況では、外部からの刺激で縦割りが打破され、連携が活性化する →本事業では地域防災に想いを持つキーマンはいるが、縦割りで活動できていないケースが散見された（波田小学校の教師、松本市防災危機管理課）。彼らが活動しやすいよう、民間企業が横ぐしを刺すことで、想定を上回るパフォーマンスを発揮してくれる。 ・地域のアセット活用 例)小学生の松本市防災ターミナルの訪問は、2020年2月の設立以降初。本訪問を通して、小学生の消防団への加入意向が劇的に高まった（前後の調査より）。災害想定や実際の避難行動など、防災教育の地域適合を高めるために、地域の防災アセット活用は有効 ・教育現場のそもそもの課題解決との連携（2兎・3兎を追う課題解決設計） 防災教育が教育現場に仕事としてアドオンする形では現場負担の増となり、持続性が無い。本件は、教育現場の潜在的な課題”総合的な学習の学習内容企画に関する教師の負担”を、官民連携による防災教育の提供で解消することで、スムーズな連携が可能となった。
<p>残課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・統計の専門家や、防災研究者の協力を得たアンケート調査のブラッシュアップ ・効果検証と運営ハードルを照らし合わせた、真に有効な施策の絞り込み ・水平展開に向けたパッケージ化（水平展開できるアセットと、地域で探すべきアセットのガイド） ・全国で行われている防災教育から検証データを取得し、防災教育に関するデータレイクの形成

■事業内容

事業内容① 産学連携による小学校での防災授業	
<p>事業内容①目 標 (提供者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全4回の防災授業の実践 ・授業実施前後でのアンケート取得(第2回～4回に関する3回分) ・各授業コンテンツの効果検証 ・避難所運営シミュレーションにおける生徒30名、保護者30名、地域ステークホルダー30名の参加(十分な検証を行うための量の確保)
<p>事業内容①目 標 (参加者側)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の防災力向上(アンケート結果が、教育実践前後で向上していること) ・生徒の行動変容(防災授業を通じて新しく生まれた行動や、優良事例の発掘) ・継続実施に向けた理解の醸成

<p>内容① 授業 1[地域を知る]松本市防災ターミナル訪問 (実施日: 11/21)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 ・松本市防災ターミナルにて、防災で重要なことについて授業 ・ターミナルの機能や備蓄について見学。その際、様々な防災機材の説明なども実施</p> <p>■成果(参加者) 小学生の防災意識が顕著に高まり、授業前後では将来的に消防団参加を希望する生徒が大幅に増加(1割→8割)</p>	 
<p>内容② 授業 2[災害を知る・備蓄を知る]デジタルによる地震体験、備蓄使用練習 (実施日: 11/25)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 ・被災経験の無い生徒が災害についての想像力を養うため、デジタルの力で地震を経験(VR 地震シミュレーター) ・防災備蓄(ベッド・トイレ)の取り扱いを練習することで、災害対応の知識とノウハウを身につけるとともに、避難所生活についての理解を深める</p> <p>■成果(参加者) ・アンケート結果で「災害を身近なことだと感じる」「避難所で備蓄が使える」などの項目が顕著に向上</p>	 
<p>内容③ 授業3[食を知る]防災食ビュッフェと研究 (実施日: 12/9)</p>	<p>■具体的な取り組み内容 ・様々な防災食を実際に作り、食べ、調べる体験を通じて、味 / 栄養 / アレルギー / 調理のしやすさなどを、ワークシートを用いて生徒ならではの視点で振り返り ・国内で初めてアルファ化米を発明した『尾西食品』が東京から授業。デジタルの力で地域の防災教育格差を埋める授業を実践</p> <p>■成果(提供者) ・様々な防災ステークホルダーが強制</p>	

	<p>されることなく好意的にこの場を活用。地域の防災士会や地域の備蓄事業者などが、運営支援や商材展示といった形で参画。</p> <p>■成果(参加者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に使用した感想の記録と共有を通じて、防災食の使い方について知見を蓄積 ・アンケート結果からは、備蓄の重要性に関する認識が微細ながら向上 	
<p>内容④ 授業 4[実践する・地域に広める]保護者と地域を巻き込んだ避難所運営シミュレーション</p>	<p>■具体的な取り組み内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が官民連携の防災授業で学んだ内容を、今度は教える側となって避難所運営をシミュレーション。招いた保護者に備蓄の扱いなどをレクチャーしながら、連携して避難所運営を体験 ・生徒が避難所受付、炊き出しを運営し、保護者を避難者と見立てて案内を体験 ・発信を通じた生徒自身の定着推進と、子供たちの発信力を生かした学校で実施された防災教育の地域への伝播を実践 ・炊き出し体験は、生徒、保護者、家族、地域の防災関係者が一堂に会した昼食会を兼ね、コミュニティのつながりを強化 <p>■成果(参加者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果から、避難所運営に関する積極性が大きく向上 	 
<p>事業内容①を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・避難所運営シミュレーションについて、参加者の規模が想定を上回り(約100名)、前例がなく企画稼働が逼迫 	
<p>事業内容①を実施する上で工夫した点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・過度な“おもてなし”を排除し、参加者全体が学んでいくという設計にすることで、運営負担を参加者とも分配。また、参加企業に裁量や権限を積極的に移譲することで、結果的に地域の防災ステークホルダーの持ち味を活かしつつ、少数メンバーで大規模運営を成功させた ・学校に既に協力している団体に声をかけ、日ごろの延長線として自然に協力を仰ぐことができた(家庭科の調理授業を支援していた日赤奉仕団に、炊き出しの支援をいただく等) 	
<p>事業内容① 残課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校内で新しい取り組みを推進することに、先生側に様々な組織的なハードルやタスクが課せられる。現場の推進者、キーマンを支えていくため、学校に閉じない連携体制の構築や意思決定の支援が必要 	
<p>事業内容② 地域全体での振り返り</p>		

<p>内容③ 松本市危機管理課による児童向けラップアップ</p>	<p>■具体的な取り組み内容 ・児童より、防災に関する質問を職位に実施</p> <p>■成果(参加者) ・自治体の災害対策業務や防災施設について疑問を解消 ・児童の地域防災についての関心の強化</p>	
<p>内容④防災備蓄ゲームを用いた防災学習の振り返り</p>	<p>■具体的な取り組み内容 ・備蓄バックを構成する防災ゲーム(NTT 東日本グループオリジナルコンテンツ)を用いて、楽しみながら防災学習の振り返りを実施</p> <p>■成果(参加者) ・学習内容の復習 ・児童間、児童と関係者の意見交換により、知識の定着を促進</p>	
<p>事業内容②を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点 ・防災意識の変化を調べるにあたり、アンケートだけでは把握できない項目が存在(学校で学んだ防災知識を、家庭内に伝播させるような行動は発生していたか、など)</p> <p>■乗り越えた方法 ・最終報告会と同日に児童向けのラップアップの授業時間をいただき、直接児童へのヒアリングの機会を創出。さらに、自治体の危機管理課にも参加いただき、児童からの質疑応答の時間を設けることで、防災学習を経てどのような興味関心に派生したかの検証を実施した</p>	
<p>事業内容②を実施する上で工夫した点</p>	<p>・防災教育に関する確立された評価手法が無い中、定量的に成果を伝える手段が必要であった ・そこで、既存の尺度(防災科研「防災リテラシー尺度」)を参考にしつつ、有識者(松本大学入江教授)の助言とNTT東日本グループの地域防災の知見を基に、コミュニティ防災と関連が深い項目を抜粋し、小学生向けに平易な表現に改変することで、本件用のアンケートを制作</p>	
<p>事業内容② 残課題等</p>	<p>・統計の専門家や防災研究者の協力を得た、アンケート調査のブラッシュアップ ・全国で行われている防災教育から検証データを取得し、防災教育に関するデータレイクの形成</p>	
<p>事業内容③ 普及・啓発ツールの制作</p>		
<p>事業内容③目標 (提供者側)</p>	<p>■防災教育の提供者(採択団体等) ・コミュニティ防災教育手法の型紙化 ・地域での自走に向けた足掛かり創出 ・関係各者への制作ツールの配備と、活用促進</p>	

<p>事業内容③目 標 (参加者側)</p>	<p>■防災教育の参加者(地域への波及効果、学生の理解度等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の推進者が周囲の理解を得る際の説明の成功確率向上、今回の関係者以外が説明にあたった際の再現性担保 ・説明のための準備稼働効率化
<p>内容① 普及・啓発パン フレットの制作 および、関係者 各所への配備 (実施日:~ 1/27)</p>	<p>■具体的な取り組み内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本コミュニティ防災教育の目的や実施内容を端的に紹介するパンフレットの制作 ・最終報告会で内容を共有し、使い方をレクチャー ・関係者に印刷物を納品(松本市危機管理課、松本市立波田小学校、松本大学) 
<p>内容② 本授業の模様 をまとめたさろ くえいぞうの制 作および、関係 者への送付 (実施日:~ 1/27)</p>	<p>■具体的な取り組み内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全授業の模様を編集した記録映像を制作 ・最終報告会で内容を共有し、使い方をレクチャー ・関係者にデータを共有(松本市危機管理課、松本市立波田小学校、松本大学)   <p>4つの授業を実施しました</p>
<p>事業内容③を 実施する中で発 生した課題や失 敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少人数で実施する中、授業を実施しながら撮影を行うためのリソース確保が課題 <p>■乗り越えた方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・防災士会から撮影に協力いただけるメンバーを選出し、協力して記録活動を実施
<p>事業内容③を 実施する上で工 夫した点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者も含めた関係者に目的を説明し、事前に一括で承認をもらうことで撮影の自由度を確保し、本案件の意義を象徴するような、地域が交流する自然な映像を記録(児童と地域の高齢者など) ・パンフレット中面は、水平展開を前提に、抽象化したイメージと具体的な取り組み双方が確認できるようレイアウトを工夫
<p>事業内容③ 残課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度の防災教育継続に向けた取り組みに活用されているかの効果検証

■参考資料

- ・波田小学校アンケートまとめ
- ・最終報告会資料
- ・最終報告会議事録

- ・普及啓発パンフレット
- ・普及啓発動画
- ・(参考)本授業に触れた児童の作文
- ・写真

授業1:

<https://drive.google.com/drive/folders/1XyuqglF9ufhWakBNnkH6K3YVsbgQO-Wb?usp=sharing>

授業2:

<https://drive.google.com/drive/folders/1UIISs6QWbdZI5jwRg9sysHGmOti5bBnb?usp=sharing>

授業3:

<https://drive.google.com/drive/folders/1wHbVOx7GBoRL245gbxpErsPoYwO8cM1q?usp=sharing>

授業4

https://drive.google.com/drive/folders/10mYAGgEPlKzWttxnNqQojCfC-I9yzYd?usp=drive_link

最終報告会

<https://drive.google.com/drive/folders/1yu0Vc18RjsRfXxKHC06jmy4sKNOL7AbF?usp=sharing>

STEP 4

避難所運営 シミュレーション

これまでの学びを活かした、児童主体の避難所運営訓練
教わる側から、教える側へ

約100名の参加者となった避難所運営シミュレーション。班分けした約30名の児童が、受付、避難所構築、炊き出しなどを率先して実践。これまで学んだ知識・ノウハウを保護者に伝えながら地域一丸となって協働



炊き出し

ポリ袋を利用した防災レシピや大釜調理、防災食を組み合わせ、炊き出しを想定した昼食を提供。食を通じた地域の絆づくり効果も見られた



受付



運搬

設置

避難所構築

発災時、実際に避難所となる体育館を舞台に、様々な関係者の支援を得ながら児童が避難所運営をシミュレーション。訪れた保護者を避難者として受付案内するなど、学習成果を実践形式でアウトプット



利用者への指導

STEP 5 振り返り

地域全体で振り返り、
コミュニティ防災教育の今後を考える

アンケート調査等により、本プログラムの効果を定性・定量両面で評価。小学校・大学・自治体・民間の防災研究所等で意見交換し、今後の地域防災の発展に向けた防災教育の在り方を議論



コミュニティ防災教育のご相談は、
NTT東日本グループの防災担当者までお問い合わせください

K25-04370[2601-2612]



わたしたちから始める
地域の防災ネットワーク

コミュニティ防災教育

地域と学校の共創教育

Community disaster prevention education



コミュニティ防災教育とは

地域の防災教育は地域の災害特性なども十分に考慮したうえで実施される必要があることから、その地域に根差した環境で実施されることが、プログラムの地域適合と持続性の観点で重要です。あるべき防災教育の実現のため、NTT東日本グループでは、義務教育課程である小学校を舞台として、地域コミュニティと連携した防災教育のモデル創りに取り組んでいます。

この取り組みでは、地域コミュニティ(先生、保護者、自治体、防災士、地域企業など)と協力し、デジタルを使った災害体験や地域の防災施設の見学など、様々な体験学習を実施。さらに学びの集大成として、児童が主体となり、保護者を招いて避難所運営シミュレーションを行います。

教員・生徒が学んだ内容を学校外・地域に伝播することに加え、協働を通じて地域のネットワークを強化・再構築し、共助力を向上します。さらには全体を通して、前後の成長をアンケート等で分析し活用していきます。

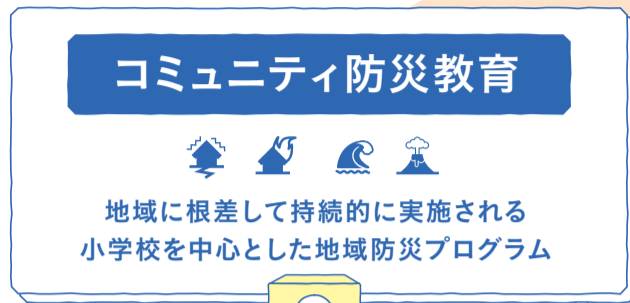
STEP 1 地域を知る

発災時に防災の拠点となる施設を訪問し、地域防災の仕組みをフィールド学習



手押しリフト体験

防災物資ターミナル見学
発災時に地域を支える防災拠点を見学し、その役割を学習



水平展開

学習内容をパッケージ化し、他の地域に共有

コミュニティ防災教育
他の地域へ



①【授業フェーズ】
官民連携により、小学校の防災教育を充実・高度化

②【拡大フェーズ】
保護者を巻き込む実践型授業で、児童が学んだ内容を地域に伝播
さらに、協働を通じて地域ネットワークを強化・再構築し、共助力を向上

STEP 2 避難所設営を学ぶ

被災経験の少ない地域の学びと備えを、官民連携とデジタルの力で支援



VR地震シミュレーター
防災に重要となる“想像力”を養うため、通学する小学校で起こりうる揺れを再現

Point!



自分たちの手で、様々な最新備蓄を組み立て、使い方を練習

STEP 3 防災食を学ぶ

作り方・味・栄養などを学ぶ防災食ビュッフェ



防災食の調理・食べ比べ
多種多様な防災食の種類を学び、実際に調理して実食。作りやすさ、味、素材、栄養など、様々な角度で意見交換

Point!

アルファ米を初めて開発した企業が東京からオンライン授業!

